



あけましておめでとうございます

校長 垣崎 晃

あけましておめでとうございます。ご家族で、よい年をお迎えのことと存じます。

活力にあふれた子供たちが大東小に戻ってきました。本年も子供たちが元気に一人一人輝く笑顔で学校生活を有意義に過ごせるよう、教職員一同力を合わせてまいります。どうぞよろしく願いいたします。

さて、正月の風物詩として「年始回り」はなじみの深い行事の1つです。始まりは古く、奈良時代には、年始に挨拶という習慣があったそうです。平安時代頃からは年の始めにお世話になった人や親族の家をまわって挨拶をする年始回りの習慣も広まりました。これは大正時代あたりまで広く行われ、正月は挨拶のために行き来する人々で通りが混雑するほどだったといわれています。これらのことから、挨拶は人と人をつなぐ、とても大切なものとされてきました。

江戸時代になると付き合いが広くなり、書状で挨拶を済ませることも増えていきます。新年を祝う書状を届けるのには飛脚が活躍しました。また、この頃には玄関に「名刺受け」を設置し、不在時にはお祝いの言葉を書いた名刺を入れてもらうという簡易スタイルも登場しました。現在でも仕事の年始回りでは「謹賀新年」など賀詞入りの名刺を使うこともあります。このように、年始回りを簡略化したものが年賀状のルーツだといわれています。

その年賀状は昔から大切な人と交わされてきました。そこには人とのつながりを大切に、相手を思いやる日本人の心が現れています。

この風習、一体いつから始まったかを調べてみますと、年賀状の歴史は古く、平安時代までさかのぼります。現存する日本最古の年賀状といわれるのが、平安時代の学者である藤原明衡（あきひら）が作った手紙の文例集『庭訓往来（ていきんおうらい）』の中にある正月の文例。「春の始めの御悦び、貴方に向かってまず祝い申し候」（春始御悦向貴方先祝申候訖）とあります。

年賀状を出すことが一般にも広がったのは、明治4年の郵便制度開始がきっかけだそうです。明治6年に郵便はがきの発行が始まり、明治20年頃には年賀状も激増しました。元日の消印をねらって年末に投函する人も増え、郵便局員たちは文字通り、不眠不休で消印作業にあたりました。

そこで取り入れられたのが、現在と同じように年末のうちに受け付けて元日に配達する年賀郵便の特別取扱いです。明治32年に導入され、徐々に全国に広がりました。その後、お年玉付年賀はがきが昭和24年12月から発行されるなどして、すっかり国民的行事になりました。メールやラインが普及した現在でも年賀状の販売枚数は国民一人あたり約27枚も販売されています。日本の伝統として、大切にしていきたいものです。

子供たちから先生たちに届いた年賀状には、気持ちを新たに今年の目標を掲げてあるものも多かったと聞いています。夢に向かうためには、自分に負けない心、負けて転んでも再び起き上がる勇気や強さをもつことが大切です。学び続ける力をつけること、豊かな感性を育てていくこと、たくましく伸びていくこと等を育てられる土壌づくりが必要であると考えます。どうぞ、みなさま今年もご支援ください。